

ださい。」

ハナは、父母と夫の前にその反物をさし出した。

「おお、とうとうでかしたか。」

藤兵衛とうべえは老いの目になみだをためて喜び、ケンも手をたたかんばかりにほめそやした。もちろん、夫の勝蔵もたいへん喜んで、

「苦労したかいがあったな。」

といったわるように言った。

その後、藍あいの香かおりも高いちぢみのシャガじまは、「阿波しじら」と命名されて、今も多くの人から、そのさわやかなはだざわりを喜ばれている。



14 黄熱病おうねつとのたたかい

ニューヨークから北へ車で四時間。山と湖に囲まれた避暑地ひしよの山荘そうで、静かに物思いにふけっている男がいた。世界的に有名な医学者、野口英世ひてよである。英世は、四十一歳さいのこの年、病気が重なり、入院するという不運にみまわれた。しばらくこの山荘で、病後の静養をしていたのである。アメリカでの十数年間の生活で、こんなのにのんびりしたのは初めてだった。

どこことなく故郷こきやうの猪苗代いなわしろに似ている風景をながめていると、幼わかいときから今までの思い出が、次々とうかんでくるのであった。

英世は、仲間から「ねむらない日本人」とよばれるほど研究に打ちこみ、世界的に注目される研究成果を





次々と発表してきた。そして、世界の一流学者の証明であるロックフェラー医学研究所の正員となった。慣れない外国での生活、仲間との激しい競争、それらを乗り越えてこの喜びを手にしたのである。

英世がここまで来るには、実に多くの人々の支えがあった。

「くじけそうになる自分をいつもはげましてくれた母。自分の才能を見出し、えん助してくれた小林栄先生。やけどの左手を手術し医学の道に導いてくれた渡辺鼎先生。アメ

リカにわたるまでのいっさいの面どうをみてくれた血脇守之助先生。アメリカでの研究生生活を親身になって支えてくれていたフレキスナー博士。さらに、自分のたび重なる借金の申し入れに応じてくれた数多くの友人たち。」

英世は、思い出すたびに目頭が熱くなった。しかし、自分はそれらの人々の期待に十分にこたえているだろうか。今までのことをふり返りながら、今だに他人の善意にあまえきっている自分をなさげなく思うのであった。

このころ、アメリカでは、黄熱病に関する研究に大きな関心が寄せられていた。黄熱病は、中・南米やアフリカなどに発生していた病気である。当時、コレラやペストとならんで、最もおそれられていた伝染病の一つであった。

ロックフェラー医学研究所の所長であるフレキスナーは、エクアドルにある黄熱病の研究グループに優しゅうな学者を推せんしてほしいと、たのまれていた。もちろんかれは、英世を推せんしようとした。しかし、十分に健康を回復

していない英世に、そのことを言うべきか迷っていた。

「野口君、黄熱病の研究グループの一員に推せんしようと思うのだが、どうだろう。ただ、わたしとしては君の体のことが心配なんだがね。」

と、思いきってたずねてみた。

病み上がりの体で、黄熱病の流行する熱帯地方へ行くのは危険だと仲間たちは心配した。だが、英世は答えた。

「所長、ぜひ行かせてください。わたしの体はもうだいじょうぶです。」

新たな研究への情熱と、周りの期待



にこたえたいという思いでいっぱいだった。

エクアドルに着いた英世は、次々と新しい発見をし、独自のワクチンを作って治療にあたった。こうした英世たちの努力で、中・南米をおそった黄熱病のあらしも、どうにかおさまった。しかし、英世と黄熱病とのたたかいは、その後も休むことなく続けられた。

英世が黄熱病の研究に取り組んで十年が経ったころ、西アフリカで再び黄熱病が流行し、多くの命がうばわれた。英世はじつとしていられず、アフリカに行くことをフレクスナー所長に申し出た。

「所長、今度こそ、病原体をつきとめる最後のたたかいです。」

「野口君、その体では無理だ。きみはここで研究したまえ。」

英世のおとろえた体を気づかったフレクスナー所長は、英世のアフリカ行きに強く反対した。だが、英世はせかされるようにアフリカへと向かった。

アフリカにわたった英世は、つかれた体にむち打ち、研究に打ちこんだ。し

かし、とうとう英世自身が黄熱病にかかり、たおれてしまったのである。

高い熱にうなされながら、英世はなつかしい母の夢を見た。

「お母さん、わたしは好きな研究を続けることができ満足です。このようにできたのも、みなさんのおかげです。」

「英世や。お前は自分の仕事に一生けん命がんばってきたんだ。その気持ちは、きつとみなさんにも伝わっているよ。」

英世は、多くの人々のいのりもむなしく、静かに息をひきとった。英世の死は、新聞などによってすぐに世界の国々に広がり、世界中の人々が英世の死をおしんだ。

ニューヨーク市ブロンクス区にあるウッドローン墓地には、「科学への貢献を通して、人類のために生き、人類のために死す」ときざまれた墓ひが建てられており、かれの業績を後の世に伝えている。

15 五十人の血

「弟の文夫は、今日、かぜで休みます。」

と、文夫の担任の先生に、和子は伝えました。文夫は、きのうから体の調子が悪く、いつもは二人で登校するのですが、今日は、和子一人で登校しました。一人での登校は何かきびしいもので、和子は心の中で、「明日は、文夫が元気になるってほしいな。」と思っていました。けれど、次の日も、次の日も、和子は一人の登校になってしまいました。

文夫の調子がなかなか良くならないので、お母さんも明日、病院に連れていくことにしました。それに不思議なことも起こったのです。それは、鼻血がずっと止まらないのです。

文夫が病院に行った日、和子が学校から帰ってくると、家にはだれもいませ

14 黄熱病とのたたかい

2-(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。(尊敬・感謝)

1 主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

わたしたちの生活は、多くの人々の支え合いや助け合いで成り立っている。そのような中で自分も生きているのだということを深く認識するとき、人は感謝の念をもつことができる。これはかけがえのない存在として自己を、そして他者をもとらえることを可能にする。人間関係を常に利害と結びついたもの、打算的なものとしてとらえていては、信頼関係を築くことができず、よりよい社会生活を送ることはできない。だが、感謝の思いから多くの恩恵にこたえようとすると、利害損得を超えた行動ができる。偉人といわれる人を生み出した多くの人の支えに着目するとき、誰もがその実践者であることを自覚することができるであろう。大切なのは、人の思いやりを感じ取れ、それにこたえて自分は何をすべきかを自覚し、実践できることであると思われる。

〈子どもの実態について〉

低学年の子の世話をすることや子ども会のリーダーとして活動するなど学校生活を中心とする多くの場で、支え合いや助け合いの意義につ

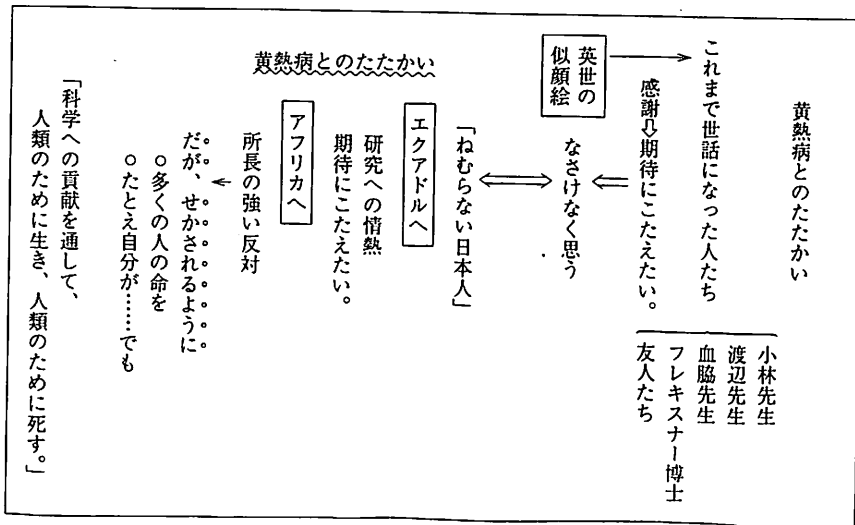
いては自覚が深まってきている。また、視野が広がり、自分たちの生活を支えてくれている家族や周囲の大人への感謝の思いを深めている子どもも多い。だが、実際の生活場面では、はずかしいなどの感情や損得にとらわれ、なかなか感謝の気持ちをあらわす行動に移せないことが課題である。

〈資料について〉

少年時代の夢を実現して医学者となり、恐ろしい黄熱病に苦しんでいる人々を救うために懸命に努力した野口英世の話である。多くの人々の援助や支えに心から感謝する姿、世話になった人々に報いるために命がけで黄熱病に取り組む姿は、人間としての在り方や生き方を考えさせる。ねらいとする価値にかかわり、今自分には何ができるのかを考えさせることが大切である。野口英世についての伝記を事前に紹介するなどすれば、その心情をより共感的にとらえることができると考える。

2 ねらい

自分たちの生活が、人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえようとする意欲を高める。



□ 板書

3 展開

学 習 活 動	支 援 上 の 留 意 点
<p>(1) 野口英世について、知っていることを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 野口英世について本で読んで知っていることや話に聞いて知っていることはありませんか。 <p>(2) 資料「黄熱病とのたたかい」を読んで、英世の考えや行爲について話し合う。</p> <p>① 目頭が熱くなったのは、英世のどんな気持ちや思いからでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで世話になった人々に対する感謝の気持ちから。 みんなに支えられてきたのに、その期待に十分にこたえられていないと考えて、なまげなく思っているから。 <p>② どのような気持ちや考えから、英世は中・南米へ行こうと決心をしたのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> 黄熱病で苦しんでいる大勢の人を救うために、精一杯研究がしてみたい。 これまで自分を支え助けてくれた多くの人にしたい分、今度は自分が人の役に立つようなことをしたい。 <p>③ フレキシナー所長の反対を押し切ってまでアフリカに向かったのは、英世にどのような気持ちや考えがあったからでしょう。</p> <ul style="list-style-type: none"> 多くの人の命が黄熱病のためにうばわれようとしている。自分が行って、どうにかしなければならぬ。 たとえ命をかけることになっても、後悔しない。 <p>④ 黄熱病にかかりたおれたしまった英世が見た夢はどんな気持ちのあらわれだったのでしょうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> みんなのおかげで自分の好きな研究を続けることができ、幸せだった。 お世話になった人々も満足してくれたらう。 	<ul style="list-style-type: none"> 出された意見をもとに英世についての理解と関心を高め、ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。 「ねむらない日本人」と呼ばれるほどの努力をしつつも、自分としては期待に十分にこたえられていないと思っている英世の心情をつかむことができるようにする。 黄熱病の流行する熱帯地方で苦しんでいる人々のイメージを抱くことができるようにする。また、そのことがどれ程に大変であり、英世の情熱と周りの期待にこたえようとする思いがどんなに強いものであったかをとらえられるようにする。 医者として多くの命がうばわれているのを見ずごすことができず、信念を貫いたところに目を向けられるようにする。 自分の研究は、人々の支え合いの上で成り立っていると感謝する英世の心情をしっかり押さえるようにする。 自分たちの日々の生活に目を向け、今の自分には何ができるのか、これからどんな行為をすればよいかを考えていけるよう助言をする。 (心のノート P54~57) 新聞、雑誌などの資料を紹介することにより、実践への意欲を高めることができるようにする。
<p>(3) 自分たちの生活について振り返り、これからの生き方について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> 今までに、自分も人々のためになることをしてみようと思っただけで行動できたことはありませんか。 交通指導のおじさんは、雨の日も寒い日も私たちの安全を守ってくれている。だから私も低学年の子の安全に気を配って登下校している。 <p>(4) 教師の脱話を聞く。</p>	